

第3回 大田区基本構想審議会第2部会 議事要旨

日時	平成 19 年 11 月 6 日（火） 午後 6 時～ 8 時
会場	大田区役所 201～202 会議室
出席者	大日向部会長、菊池委員、菅谷委員、宮澤委員、村松委員（五十音順）
欠席者	幸田委員、柳ヶ瀬委員

1. 開会

2. 配布資料の説明

3. 審議

【生涯学習】

- ・ 今回、事務局では「生涯教育の充実においてなにをめざすか」、「生涯教育を支える拠点のあり方とは」という2つのテーマを設定しているが、両テーマは連動するものなので、一本化した議論としたい。生涯学習が前面に出てきた背景としては、教育基本法の改正がある。しかし、すべてを生涯学習として議論できるかは疑問である。乳幼児から高齢者までのライフ・スパンとしてみた場合、学習者の主体性だけを重視してよいか。担い手の議論もするべきである。改正基本法では社会教育が後退しているが、図書館、博物館など、提供者の役割を見直す必要がある。資料には「社会教育」が抜けているが、施設整備の議論をするためにはその視点が不可欠である。
- ・ 私はまちづくりに関するボランティア活動をしているが、生涯学習と意識して始めたわけではないし、また、現在も意識して行っているわけではない。「歩きにくいな」と感じるが多々あり「このまちはこれで良いのか」と考えて始めた。活動を通じて、仲間に関わり、意見交換をする、行政に提案するといった活動に充実感を感じている。
- ・ 今回の議論は、大田区の（生涯学習に関する）ビジョンと、区民が（生涯学習を）どう考えていくべきかのどちらに帰着するものなのか。人は社会になんらかの形で関与する必要はあるが、それは押し付けられるべきものではない。前出のご意見のように自然に参加していくものである。生涯学習のテーマがボランティアに偏りすぎるのはよくない。ボランティアの意思を区民が自発的に持てるか。そうした意思をつむいでいけるような啓発活動が重要ではないか。
- ・ 学ぶということは重要なことであるが、その背景に平和や安定した社会がなければならない。人は学生、主婦、会社員、退職者、いろいろな立場で学ぶ。そうしたいろいろな

立場の人に沿う環境を提案していくべきである。

- ・ 生涯学習と聞くと大きなテーマのように感じる。自分に照らしてみると、「知らないことを知る」のは楽しいことである。しかし、そうした欲求を満たす方法を意外と知らない。実現に向けて何をすればよいか。勤務先で公開授業への協力などを行っている。中学生に教えるのは大変であるが、達成感もある。
- ・ 確かに、「生涯学習」というと漠然としている。なぜ、漠然としているかといえば、主体の幅が広いから。人生の後半では余技の側面が強まるが、実際には、中学生、高校生あるいは男性、女性と生涯学習の対象が広い。対象ごとにキーワード探しをすることが必要かもしれない。学ぶことは楽しい。それをどう生かしていくか。これまでは、何を、どのように生かすかの部分が漠然としていたため、学習の着地点としてボランティアがクローズアップされていた。しかし、状況は変化しており、カルチャーセンターでも受講後、自分も講師になれるなど、成果が行かせるものに人気が集まっている。
- ・ 「生涯学習の充実」といわれるとピンとこなかったが、対象を絞ったなかでキーワードをみつけるというのであれば対応できそうだ。PTA はボランティアではなく、義務の活動である。お金をもらわなければボランティアというわけではない。町会、防災も同様。一定の人を義務的に動員している。前回は議論になったが、成果を活用したい人と地域のニーズをコーディネートする仕組みが必要だ。コーディネートの実現が、情報によるものか、人の配置によるものか、施設によるものかはわからないが。
- ・ 中教審の議論でも、生涯学習アドバイザー、コーディネーターという言葉が挙がっている。従来は社会教育の主事がそれにあっていたが、今後は新しい担い手を考える必要があるのかもしれない。ここからは対象別に生涯学習の理念を話し合うことにしたい。働き盛りの男性にとって PTA 活動はいかがか。
- ・ かなりの時間を PTA 活動に裂いている。これをボランティア、生涯学習とはとてもいえない。
- ・ 時間に余裕のない働きざかりの男性にとって生涯学習とはどのような意味をもつか。
- ・ 「親父の会」のようにボランティア的なかかわりができる活動もある。こうした活動への参加は増えている。また、平日の学校公開には父親が沢山来るし、みな興味は持っている。参加しやすさがあれば、参加したいが、対応する器が硬直化している、または、負担が大きい役となると腰がひけるといったところだろう。
- ・ 杉並区の和田中学校では「よのなか科」を設けて、社会人が仕事上のスキルや経験を子どもたちに教えている。これは子どものために始めたことであるが、自分にとっての生涯学習にもなっている。エンジン役はリクルート出身の藤原校長である。地域の 40 代、50 代からアドバイザーやコーディネーターを発掘していけると良い。
- ・ 自分を振り返ってみると、ワークライフバランスが取れていない、ワークに偏った生活を送っている。しかし、サークル活動や講座に出向くことはないが、趣味を楽しむ機会は持ちたいと考えており、バランスをとっていきたい。また、地域と密接につながって

いきたいと考えるが、どのように実現したらよいかはわからないといった状態。

- ・ 今回のテーマでは、生涯学習について行政との接点についても考えるべきではないか。
- ・ ここまででいくつかのキーワードが出ている。「知ることの喜び」、「知識を自己実現につなげる」、「得たものをどのように社会還元していくか」など。学習を地域で活かし、手ごたえを感じることができることは喜びである。全くの無償でよいかという問題もあるが、人に喜んでもらう、まちが変わることに意義をみいだすという考え方もある。また、担い手の問題も重要である。主体は区民だけなのか。施設、人材の育成に行政はどのようにかわるか。こうしたポイントを念頭に現存施設の点検をするという方向でいかがか。
- ・ キーワードとして「参加しやすい」も挙げたい。実は参加しやすいとは、抜けやすいことでもある。参加したらやめられないものは敷居が高い。
- ・ キーワードとして「地域のなかで仲間が増えていく」というものもある。大勢の人とのふれあいが増えていくことが大事。自分は将来的に図書館の司書等をして子どもたちと接点を持ち続けたいと考えている。それが実現するためには年金がしっかりしているなど、周辺的な条件が整っていることも必要。
- ・ 生涯学習の理念と担い手は一体である。現在、(大田区に)入ってみたいと思う施設はどの程度あるか。子どもたちにとって図書館は行きたい場所となっているか。
- ・ 蔵書、インターネットの利用など、図書館に関する区民からの要望は多い。子どもに配慮して欲しいなどの要請もよく聞く。
- ・ 浦安市の図書館には中高生が殺到している。子どもたちに勉強のスペースを提供しているからである。滞在している間に本に触れることも多い。区内の文化センターの活用はどのようになっているか。育児中の女性の生涯学習の場は少ない。育児中の母親にも機会を提供したい。
- ・ 今の話を聞き、図書館のあり方は変わってきていると認識した。勤務する大学の図書館も変わってきている。学生の期待は自己学習であり、夜は11時まで開館している。
- ・ 大田区にプールは4施設あるが、障がい者向けに専用の時間帯があり、貸切りになる。障がい者の水泳大会があり、それに参加すること、入賞することは大きな喜びとなっている。もっと利用機会を増やすことはできないか。
- ・ 大学や企業が地域に施設をオープンにするということがもっと進むと良いと思う。
- ・ 高齢者の生涯学習のサポートも必要である。現在の高齢者センターのプログラムには限界がある。ゲートボールと手遊びでは満足できない人も多い。現在、注目されている団塊の世代の学習支援に加えて、中期・後期高齢者へも配慮が必要。
- ・ 60歳以上しか参加できないスローピッチというゲームがある。先日、大田スタジアムで「日野原カップ」をめぐる大会があった。高齢者も外にできるべきである。ところで、大田スタジアムは他区の人にもよく使っているが、区民を優先して欲しい。
- ・ 学習のメニューはそれなりにある。情報がいかに浸透させるかが課題。区民の要求にこ

たえるためには、相談機能も必要。

- ・ いかにコーディネーターを育成し、既存の施設を活性化するかは課題である。大田区には外国籍の住民は多いか。
- ・ 約1万6000人が居住しており、中国、韓国、フィリピン籍の人が多い。
- ・ こうした人にとっての配慮も必要である。「大田文化の森」のイベントでも異文化交流をテーマにしたものが多いが。
- ・ 図書館、プール、学校の活用の現状についてうかがいたい。
- ・ かいつまんでご説明する。学校開放では、校庭、体育館、特別教室を区民5人以上の団体に貸し出している。利用者累計128万人の実績がある。放課後の学校および校庭開放では児童に自由に安全な遊び場を提供している。行事開放、スポーツ開放もある。
- ・ 施設の数が多いが、魅力はどうか。
- ・ 何に重点を置くかで変わって来る。空き教室は増加している。授業中は使用できないが、検討の余地はあると思う。
- ・ 図書館、学校、スポーツ施設についてみてきたが、博物館の利用はどうなっているか。
- ・ 区内の博物館としては郷土博物館がある。分館として区の伝統産業の歴史を紹介する「のり博物館」を建設している。区が所有者の寄付を受けて博物館にしている施設もある。
- ・ 他に検討していないインフラはないか。思春期の子どもの居場所はどうか。
- ・ 児童館がある。前回もお話ししたが、テレビの特集でみた他の地域と比較すると、大田区の児童館、学童保育は比較的良い状態である。
- ・ ユース杉並が有名であるが、大田区にも子どもの居場所として子ども交流センター「こらぼ」がある。しかし、指導員の環境が整っていない印象を持った。ボランティアだけでは担いきれない。
- ・ 中高生の居場所づくりは、どこも一番遅れている。仲間同士で学びあう場が必要。
- ・ 「こらぼ」は大森にあり、地域のボランティアによって自発的な運営がなされている
- ・ 指定管理者か？
- ・ 地域の運営協議会による運営である。地域活動のコーディネーターを置いている。
- ・ 大田区は区民が中心になって行う活動は活発か。
- ・ 地域差がある。
- ・ 港区にも類似例があるが、「こらぼ」は廃校を地域の人がどのように活用するかを話し合った結果、誕生した。2階は区民活動を活発にするためにNPOに管理をお任せしていたが、徐々に地域も交えたNPOに変わった。全国にあまりない地縁とNPOの合体による運営である。
- ・ はじめに「人」ありきである。時代の趨勢として指定管理者制度が広まっているが、時間をかけて団体を育てることも重要である。
- ・ 大田区の生涯学習がどうあるべきかを考えるコーディネーターを育てることが必要で

はないか。理念を実現するための拠点、拠点運営の担い手を行政が育成し、生涯学習の進め方を明らかにしていくと良い。

- ・ 社会福祉教育として、障がい者が 20 人以上いる団体は地域振興助成金の対象となる。総額 500 万円を団体に振り分けていくが、グループが増えると各団体あたりの割り当ては減少する。こうした団体は自己資金が少ない。もう少し、助成金を充実すべき。
- ・ 三島市はきれいなまちであり、まちの再生で国土交通大臣賞を取った。その活動は企業、行政、住民の出資によって担われた。何に対してであれば、出資するかを考えることも良い。
- ・ 本日の議論では区民一人ひとりが新しい知をつむぐ喜び、つながりをつくる地域力の源泉など、さまざまな視点が出された。担い手の問題を考えた場合は、何らかの区の助成も必要である。人材の担保は公的な役割であり、学ぶ側の主体性だけでなく、社会教育が担ってきた役割の見直しが必要であろう。同時に、区民、企業も必要であれば持ち出しをすることも考える必要がある。

4 . 事務連絡

5 . 閉会

以上